特別な支援を必要とする子どものための実践ヒント集

平成 25 年 3 月

岡山県教育庁特別支援教育課

は　じ　め　に

平成１９年４月１日の改正学校教育法の施行から６年が経過しようとしています。

文部科学省が平成２４年度に実施した全国調査によると、小・中学校の通常学級において、発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒が約 6.5%在籍しているということが明らかになりました。また、文部科学省が平成２４年に行った「特別支援教育体制整備状況調査」の結果からは、公立全小中学校において、実態把握の実施、校内委員会の設置や特別支援コーディネーターの指名がされるなど、基礎的な支援体制の整備は確実に進んでいることが示されています。

県教育委員会では、これまで小中学校等の教職員を対象に、「通常学級における指導充実事業」「特別支援学級担任リーダー養成事業」「特別支援教育支援員セミナー」「専門指導員派遣事業」等を通して、就学前から高等学校における特別支援教育の充実に努めてきました。また、県総合教育センターにおいても、特別支援教育に係る研修や学校支援の事業等を通じて、教職員の資質向上に向けた取組を進めてきました。

しかしながら、発達障害等特別な支援を必要とする子どもの指導を充実させるためには、今後も引き続き取り組むべき課題が多くあります。通常学級では、個に対する適切な指導・支援の充実に向けて、教職員の意識は高まっていますが、集団での活動や生活を基本とした学級経営、授業における指導・支援の在り方等について、今後一層の実践の積み重ねが求められています。また、特別支援教育支援員についても、研修の機会等を設けていく必要があります。

このヒント集は、平成２４年度の特別支援学級担任リーダー養成事業に参加いただいた小中学校の先生方の考え方やアイデアを基に、日常の指導・支援に生かせるヒントとなるような事柄を編集したものです。小中学校等の教員や特別支援教育支援員をはじめとして、特別な支援を必要とする子どもたちに関わる方々が、子どもを見る目、つまずきの要因を探る視点、具体的な支援方法などについて、取組を進められる際の一助となればと願っています。

平成２５年３月

岡山県教育庁特別支援教育課長
森　本　　克　美

目　次

○　本ヒント集を活用するにあたって…… 1
○　特別な支援を必要とする子どもについて…… 2
１　話すことが苦手…… 4
２　読むことが苦手…… 6
３　文字を書くことが苦手…… 8
４　計算問題が苦手……10
５　図形が苦手……12
◇　支援の工夫コーナー……14
６　不注意な間違いが多い……16
７　最後まで話が聞けない……18
８　苦手な活動に取りかかりにくい……20
９　忘れ物が多い……22
10　相手の気持ちを考えずに行動してしまう……24
◇　支援の工夫コーナー　……26
11　こだわりが強い……28
12　過敏なところがある……30
13　気持ちが切り替えられない……32
14　学校行事や集会活動が苦手……34
15　孤立しがち……36
16　予定の変更が苦手……38
17　係や当番の仕事が苦手……40
18　時間の感覚が弱い……42
19　授業中に席を立ってしまう……44
◇　支援の工夫コーナー……46
◇　参考資料（個別の指導計画、個別の教育支援計画、個別支援シートの様式例）……54

本ヒント集を活用するにあたって

本ヒント集では、学校の教員や特別支援教育支援員等から、当課への質問や問い合わせが比較的多い事例等について、実際の指導場面において参考となる指導・支援の内容や方法の参考例を紹介しています。発達障害のある子どもによく見られる１～１９の各項目について、以下のような構成となっています。

1. **「子どもの姿」**……「〇〇な子どもがいたらどうしよう？」、「〇〇が苦手な子どものためにはどうすればよいのだろう？」と先生方が頭を悩ませることの多い子どもの姿を想定しています。

2. **「考えられること」**……子どもの姿から考えられる、つまずきの背景にある要因等を示しています。発達障害（学習障害や注意欠陥多動性障害、広汎性発達障害など）の特性や、人的又は物的な環境、性格や心理的なことなど、複数の視点から見ていく必要があります。

3. **「指導目標」**……児童生徒の姿やそこから考えられることをふまえて、子どもの成長につながる指導目標の例を示しています。

4. **「目標達成のための指導・支援」**……設定された指導目標を達成するための指導・支援の方向性や、内容・方法等について、いくつかの例を紹介します。

また「支援の工夫コーナー」では、役立ちそうな教材等を、写真やイラストで紹介しています。

子どもの障害の状態や年齢、性格、生活背景などは各自違っており、学校の指導体制や地域を含めた支援体制も異なっています。本ヒント集を参考に、各学校、各学級において、子どもの実態に応じた取組を進めてください。

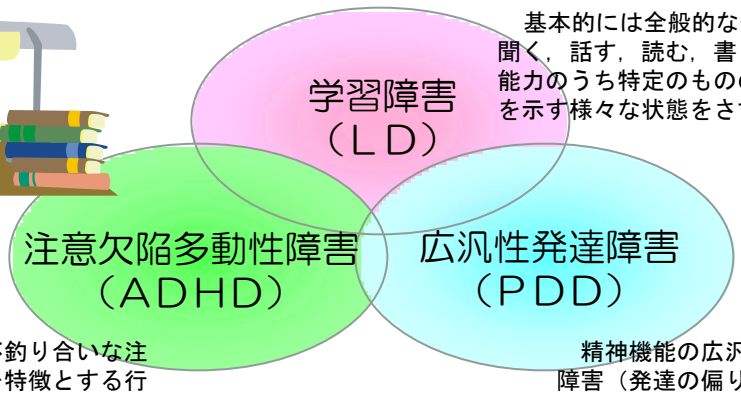
◇本ヒント集は、岡山県教育庁特別支援教育課のホームページにも掲載しています。（http://www.pref.okayama.jp/soshiki/147）この他にも、「校内支援データベース」があり、県内の小・中学校等での実践例を紹介しています。（http//www.pref.okayama.jp/site/16/detail- 21895.html）実践例の紹介については「校内支援データベース」の「入力フォーム」から投稿していただくこともできます。

◇岡山県総合教育センターのホームページには、通常学級及び特別支援学級における指導・支援、授業づくり等に関する参考資料が多数掲載されています。（http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/gakkoushien/tokubetusien/index）

◇本ヒント集についてのご意見、ご感想及び実践例の紹介等がありましたら、岡山県教育庁特別支援教育課までご連絡くださいますようお願いします。今後の施策や刊行物の発行等に生かしてまいりたいと思います。

特別な支援を必要とする子どもについて

特別な支援を必要とする子どもの中には、発達障害のある子どもがいます。
発達障害とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものをいいます。



基本的には全般的な知的発達に遅れはないが，聞く，話す，読む，書く，計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態をさすもの

年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力，衝動性，多動性を特徴とする行動の障害で，社会的な活動や学業の機能に支障をきたすもの

精神機能の広汎な領域に関係する発達障害（発達の偏りや問題）という意味である。実際の臨床では，自閉症及び自閉症に類似した特徴を示す発達障害の総称として用いられるもの

発達障害に由来する二次障害

○発達障害のある子どもの中には、長期欠席や問題行動，学力不振といった課題が見られることがあります。
○こうした課題は、勉強をがんばっているのにできない、忘れ物が続いて叱られる、友達とうまく遊べない等といった失敗経験を繰り返す中で、自信や意欲を失い、できることもできなくなっているような状態の中から生じます。これらは二次障害といわれています。

本人の特性だけでなく、本人、保護者の思いを大切にしながら二次障害の予防と改善を意識して指導・支援にあたる必要があります。

二次障害を防ぐためには･･･

「正しい理解」
「教職員間の共通理解」
「早期からの組織的，
　　継続的な取組」
が不可欠です。

子どもをみる「視点」

特別支援教育を進めていくためには、子どもの実態把握に努め、特別な支援を必要とする子どもの存在や状態を把握することが支援の第一歩です。その際には、複数の教職員の意見や、医療機関等の関係機関からの情報をもとにするなど、子どもの実態を総合的に判断することが必要です。中学校や高等学校では、教職員が学級担任や教科担任、部活動顧問などのさまざまな立場で生徒と関わるため、「気づいて共有する」意識を常にもっておくことが大切です。

〔行動面〕

・授業中やホームルーム活動などで注意を集中し続けることが難しい。
・一斉の指示では行動に移すことができにくい。
・仕事を最後までやり遂げることができない。
・授業中に席を離れてしまう。
・周りの音や様子などが気になり、集中して取り組めない。
・自分の行動の結果を予測することができにくい。
など

〔学習面〕

・他の教科に比べて極端に苦手な教科がある。
・簡単な指示に対して、聞き間違いや聞きもらしをすることがある。
・板書が写せない。または、写すのに極端に時間がかかる。
・思いつくままに話すなど、筋道の通った話をすることが難しい。
など

〔生活面〕

・冗談やユーモアを理解せず、ことばどおりに受け止めていることがある。
・自分が非難されたり、非難されていると思い込んだりすると、過剰な反応をする。
・口げんかやもめごとなど、友だちとのトラブルが多い。
・急な日程変更や変化があると対応できない。または、自分なりの独特な日課や手順にこだわりがある。
など

※これらの様子は、程度の差はあっても誰にでも当てはまりそうなことですが、このような行動等は、発達障害が原因となっていることも考えられます。

特別な支援が必要であると考えられる子どもについては、特別支援教育コーディネーターや担任等を中心に多面的な情報収集や検討を行い、保護者の理解を得ることができるよう慎重に説明を行うことが大切です。その上で学校や家庭、地域での必要な支援や配慮について保護者と十分話し合い、連携しながら支援を進めることが必要です。関係機関との連携や、特別支援教育支援員等が個別に関わる必要のある児童生徒に対しては、「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」を作成し、チームで支援をすることが大切です。

※子どもの発達や支援方法を探る手がかりを得るために、特別支援学校等の専門指導員等の活用や、保護者や本人の承諾のもと、心理検査を実施することも考えられます。

1　話すことが苦手

子どもの姿

　Ａさんは、教職員や友だちに聞いてもらいたいことがたくさんあるのですが、ことばの使い方の間違いや話している内容の飛躍などがあります。また、あいまいな表現も多く、気持ちがうまく伝えられないことがあります。

　担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、日常生活で使うことばの理解は年齢相応にありますが、自分の思っていることや考えたことなどを表現することや伝え方に課題があるようです。

考えられること

Ａさんの姿から考えられることとして、

◇記憶力が弱い。
◇順序立てて理解することができにくい。
◇文に構成することが苦手。
◇過去にうまく話せなかったり、話している時に注意されたりしたなど、いやな経験がある。
◇話すことに自信がない。

などが挙げられます。他にも、

◇他者の気持ちについて理解できにくい、相手はわかっていると思い込んでいる。
◇事実と想像の区別をせずに話してしまう。
◇つながりを意識できず、思いついたことを言ってしまう。

など、コミュニケーション上の難しさがあることも予想されます。また、

◇周りが話を聞いてくれない状況になっている。
◇コミュニケーション経験の不足しがちな環境にある。
◇人との会話が少ない。
◇保護者が多くを代弁してしまう。

といった環境面での要因もあるかもしれません。

指導目標

〇自分の思いを適切なことばで相手に伝えることができるようにする。
〇自分の伝えたいことを整理して話すことができるようにする。
〇自信を持って話すことができるようにする。

目標達成のための指導・支援

- 本人が話すときには、教職員はじっくりと耳を傾けて、受容的に話を聞くように心がけます。そして、伝えようとしている内容を適切なことばで言いかえたり補ったりするようにします。本人が安心して自信を持って意欲的に話すことができるように配慮することが大切です。
- 教職員が、順序立てて「いつのことか？」「だれが？」「どこで？」「どうしたのか？」といった質問をし、それに合わせて話させるようにします。教職員の助けのもとに、順序よく整理して話すことを経験できるようにします。（参考→支援の工夫コーナーP14）
- 本人が話しているときに、つまったり口ごもったりして困っている場合には、教職員がことばを提示して選択させたり、教職員がことばを補ったりして、話をうまく進めていく手がかりを与えるようにします。
- 自立活動の時間などに、ロールプレイなどを通して自分の思いや考えを相手に伝える場面を意図的に設定することも有効です。
- うまく言えた場合、適切な表現ができた場合には、しっかりと称揚し、自信を持つことができるようにします。
- 教職員が何度もしつこく聞き返すと、話す意欲が減退します。心理的な面での配慮が大切です。
- 家庭でも、「じっくりと聞く」、「自信が持てるように関わる」、「しっかりほめる」など同様な配慮が必要であることを理解してもらうことが重要です。

2　読むことが苦手

子どもの姿

　Ｂさんは、文章を読むことが苦手で、よく読み間違いをします。教科書を読むときも、文節のまとまりを意識して読むことが難しく、一文字ずつ拾って読んでしまいがちです。

　担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、教職員の話を聞いたり、友だちと話したりする力は良好ですが、書いてあるものについては、文字の形を瞬時に捉えたり、音声で表現したりすることが難しいようです。

考えられること

Ｂさんの姿から考えられることとして、

◇文字の形を視覚的に捉える力が弱い。
◇文字と音がつながらない。
◇文字を音に変換する力が弱い。
◇音に出すこととことばのまとまりを考えることの両方を同時に行うことができない。
◇読むべき文字から注意がそれやすい。

などが挙げられます。さらには、「読むことについて自信がない。」「恥ずかしい。」といった思いから、

◇読む意欲が低下している。
◇読む経験が不足している。

といった悪循環を起こしている可能性もあります。

指導目標

〇単語カードを用いて、単語を読むことができる。
〇文節のまとまりに気をつけて文章を読むことができる。

目標達成のための指導・支援

- フラッシュカードを使った学習において、２文字の単語を読む学習から始め、３文字の単語、４文字の単語…へと提示する文字数を増やしていきます。その際には、表に絵や写真を、裏に文字を書いたものを使います。絵を見せて文字と絵を結びつけて提示することで、記憶しやすくなります。また、 読み方がわからなければ、すぐに絵（写真）を見せ、反復練習を多くすることで記憶しやすくなります。
- 単語読みの活動ができるようになってきたら、文節ごとに文を区切ったことばを書いたフラッシュカードを使用し、覚えて読む活動を行います。（例：「ねこが」「さかなを」「たべました」）
- 文章に関係のある絵や写真を準備しておき、書いてあることの意味を推測しながら読むことができるようにします。
- 長い文章などは、文節ごとに区切った印（例：赤色の／）を入れたり、分かち書きにしたりします。読むときには、分かち読みで文節を意識しながら練習をします。
- プリントなどは、文の行間を広めにとります。読む際には、下敷きや物差し等を使って、前後の行に視線が向かないようにするなどの工夫が必要です。読むべき行だけが見えるように、前後の行を隠す補助具を使うことも効果的です。（参考→支援の工夫コーナーP14）
- 読むことの苦手意識を軽減できるように、漢字にはふりがなを付けたり、読み間違えやすい単語に色や印を付けたりします。
- 必要に応じて、読みやすい大きさのフォントで、プリント等を作るようにします。
- 事前に読む部分を伝えておき、家庭で練習しておくようにすることにより、学校での学習に対する参加意欲の向上や苦手意識の軽減につながります。

３　文字を書くことが苦手

子どもの姿

　Ｃさんは、文字を書くことが苦手です。ひらがなやかたかなでは形が似ている文字の間違いがよく見られます。鏡文字やへんとつくりが逆になった漢字を書いてしまうこともあり、細部に書き間違いが多くあります。

　担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、音読の際にひらがな、カタカナなどの読み間違いが少し見られましたが、自分で修正しながら読むため、あまり目立たないようです。漢字の書き取りについては、画数が多いなど、形が複雑な文字ほど間違いやすいようです。

考えられること

Ｃさんの姿から考えられることとして、

◇形を正しくとらえたり、見分けたりすることができにくい。

◇形を正確に記憶することができない。

◇細部にまで注意を向けることが難しい。

◇位置関係の把握が難しい（上下左右、縦横、線の交差など）。

などが挙げられます。そして、身体の動きに関しても

◇手先が不器用。

◇目と手の協応動作が難しい。

◇鉛筆を握った指への力の入れ方やコントロールが難しい。

などの困難さが予想されます。さらに、

◇書くこと自体に自信がない。

◇意欲がわかない。

という思いを強くしているかもしれません。

指導目標

〇よく似た形のひらがなを正しく書くことができる。
〇前学年の漢字を正しく確実に書くことができる。

目標達成のための指導・支援

- 線をなぞる、点を結ぶなど、文字を書く練習を簡単な課題から始めるようにします。
- 漢字をへんやつくりなどの部分に分けて書き、漢字の構成を意識しやすくします。また、漢字を分解し、再構成する活動にも取り組ませます。（例：「日」＋「月」＝「明」、「田」＋「力」＝「男」）
- 文字を書く練習をする際、文字の形や部分、運筆の様子などを、声に出して（擬音語や意味づけ）覚えやすくします。
- 鉛筆や消しゴムなど、本人が使いやすいものを用意します。鉛筆を握ることがうまくできにくい場合は、補助具を使用して握りを安定させることも効果的です。（参考→支援の工夫コーナーP15）
- 授業では、必要に応じて積極的にワークシートを用いるようにし、書く量を調節して、書く作業による負担を軽減します。
- マス目の大きいものや枠や中心線などの罫線の引いてある用紙を使い、書きやすくします。このとき、対象の子どもだけにそのような用紙を配付するのではなく、必要とする児童が誰でも選んで使うことができるようにしておくことで、「特別な扱い」という印象を他の子どもに持たせないことにつながります。
- 画数の多い漢字は大きく示したり、へんやつくりなどの部分ごとに色を変えて提示したりして、漢字の構成をわかりやすく提示します。（参考→支援の工夫コーナーP15）
- 格子の目を使って促音などの文字の位置、漢字のへんやつくり、かんむりなどの各部分の位置を視覚的に理解しやすく提示することも効果的です。
- 完璧に書けていなくても、本人に伝わるような工夫をして称揚し、励ますようにし、書く活動への意欲を維持できるような配慮が大切です。

4　計算問題が苦手

子どもの姿

Ｄさんは、計算に苦手意識が強く、既習の足し算の問題でも取り組むことを避けてしまいます。

担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、10 までの数の概念は理解していることはわかりましたが、100 までの数を正しく数えることが難しく、いくつか数字をとばしてしまいます。また、足し算や引き算の計算も間違いが多く、特に繰り上がりを必要とする筆算については、けたがずれてしまい、よく間違えてしまうため、それらの問題を見ただけで、取り組もうという意欲を失ってしまいます。宿題にもなかなか取りかかることできず、保護者が指摘すると怒り出すため、最近は宿題を提出しない日が増えてきました。

考えられること

Ｄさんの姿から考えられることとして、

◇数の概念の理解が不十分で、数の大小、順序関係、合成･分解などが定着していない。

◇短期記憶（特に聴覚的な記憶）が弱いため、計算の途中で操作している数を忘れたりしてしまう（繰り上がり・繰り下がりの有無や数）。

◇注意力が弱いために、数字の見誤りや書き誤りなどのケアレスミスが見られる。

◇視覚認知（空間の位置関係の把握）が難しいために、筆算や位取りがうまくできない。

◇適切なノートの使い方が定着していない。

などが挙げられます。さらに、心理的な面において

◇計算に苦手意識がある。

◇間違いが多いため、成功体験が不足しており、自己肯定感が低い。

といったことが考えられます。また、家庭において、本人の特性に対する理解不足や過度に大きな期待など､本人にとって負担となる環境があるかもしれません。

指導目標

〇計算に自信をもって取り組むことができる。
〇けたをそろえて筆算（２けたの足し算、引き算）ができる。

目標達成のための指導・支援

- 取り組む問題数を少なくし、まずは本人の負担感を軽減することが大切です。
- 具体物を利用し、一位数の合成や分解の計算練習をしたり、10 ずつのかたまりで２けたの数を表すことの理解を促したりするなど基礎的な内容に丁寧に取り組ませていくことが必要です。そして、繰り上がりのない筆算のしかたについてまず定着させた後、くり上がりのある筆算につなげていくようにします。
- けたがずれやすくなる原因を取り除くために、マス目が入った用紙やノートを使うようにします。
- 繰り上がった数や繰り下がった数を書く場所を決めておくなど、ノートの使い方などのきまりも繰り返し確認しながら定着を図ることが必要です。位取りが誤っていないか確認する際には、位分けの線を引かせるなどの方法が有効でしょう。
- 繰り上がり、繰り下がりの数や引いた残りの数の足し忘れがないか注意を向けるように声をかけます。
- 保護者と連絡を密にし、同じスタンスで見守る、できたことを家庭でもしっかり称揚してもらうなど、少しでも意欲や自信につながるように協力してもらうことも大切です。

5　図形が苦手

子どもの姿

　Ｅさんは、図形問題が苦手です。いろいろな形の中から決まった図形（三角形や正方形等）を探し出す問題や、見本を見ながら模写する問題が苦手でしたが、なんとかがんばって取り組んできています。それでも見取り図や展開図等の問題などは苦手です。

　担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、書字についても、整った文字を書くことができず、「とめ」や「はね」等についても細かい誤りがみられました。図画工作等のはさみを使った活動等でも困難さがみられました。

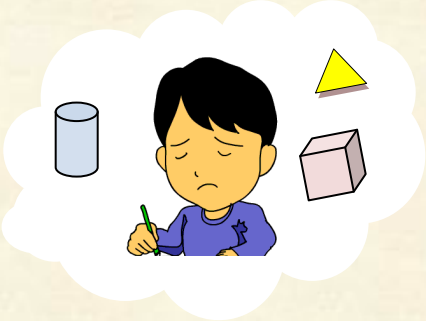
考えられること

Ｅさんの姿から考えられることとして、

◇視覚認知の力が弱いので、図形を正確に捉えることができない。そのために、辺、頂点、面などの関係がわかりにくい。線のつながりや交わりなどがとらえにくい。

◇空間認知の力が弱い。そのために、見取り図等と立体とを結びつけて考えることが難しい。

といったことが挙げられます。さらには、



◇手指の巧緻性に問題がある。

◇目と手の協応動作が難しい。

などのために、

◇絵や図、字などを正確に書けない。

◇定規を使ってうまく線を引けない、手先を使った細かい操作がうまくできない。

といった困難が生じていることも考えられます。また、うまくできないことによる、

◇自己肯定感の低下や学習意欲の低下

などが心配されます。

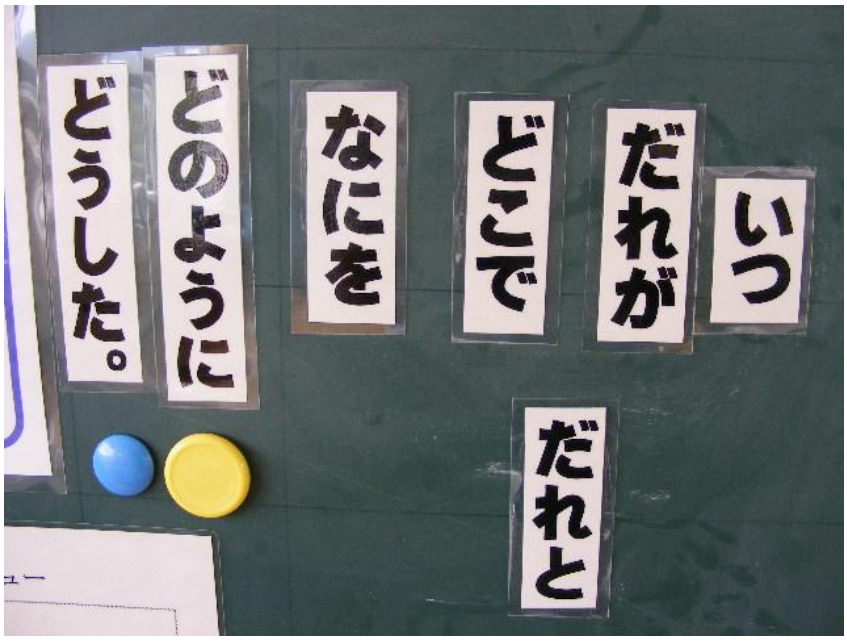
指導目標

〇平面図形や立体図形の特徴を捉えたり、弁別したりする力を伸ばす。
〇字や図形などを書くことに意欲的に取り組むことができる。

目標達成のための手立て・支援

- 図形に関する学習の際には、平面や立体模型の教材に触れる活動を設定し、指でなぞったり手のひらで押さえたりして、頂点、辺、面などを意識できるようにします。立体模型や身の回りの立体の具体物をいつでも触れることができるよう置いておくのも有効な支援です。
- 展開図を自分で組み立てて立体にするなどの操作的な活動が効果的です。
- ＩＣＴ教材を活用し、立体を自由にいろいろな角度から見たり、立体を展開していく過程を見たりすることができるようにすると、イメージしやすくなります。
- ことばで意味づけながら説明するようにし、図形の特徴を捉えるための手がかりを持つことができるようにします。
- 定規やコンパス等の道具の使い方等の指導を丁寧に行い、練習の機会を十分に確保します。
- 苦手意識を軽減するために、友だちと一緒に活動することや、できなくても恥ずかしいと感じなくてもすむような周囲の温かい雰囲気作りも必要です。
- 得意なことを称揚して伸ばすことによって、苦手なことにも「やってみよう」という気持ちを持って取り組むことができるようにすることも大切です。

支援の工夫コーナー

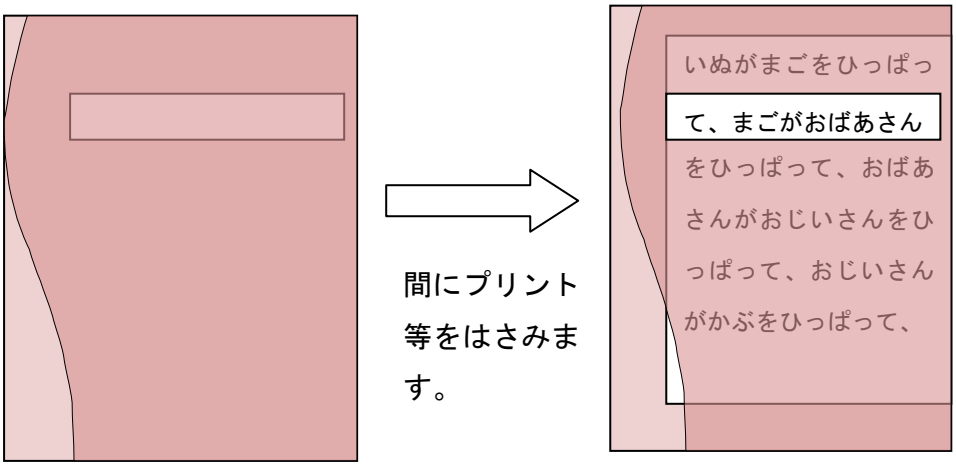


順序立てて話すことが難しい場合

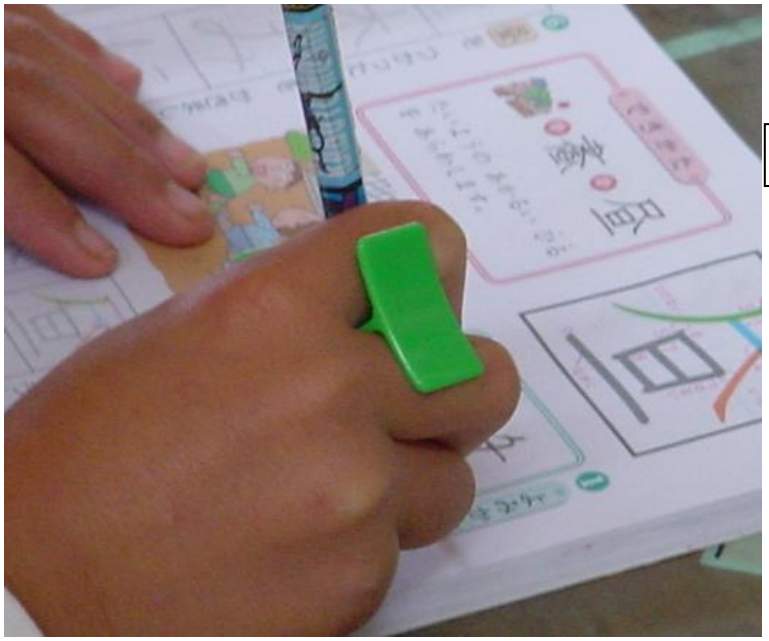
教師が「いつ？」とか「だれと？」などと質問しながら話をさせるようにする際に適宜提示しながら使います。その活動に慣れてくると、黒板に貼ってあるこれらのカードを自分で見ながら、教師が尋ねなくても、順序立てて話すためのポイントを押さえて話すことができるようにしていきます。

行をとばして読んでしまう場合

↓カラークリアファイル



カラーのクリアファイルに細長い穴（スリット）を空け、その行だけが見えるようにした補助具を使って読むことも効果的です。



鉛筆がうまく持てない場合

鉛筆を指ではさむ位置がわからない場合には、写真のような補助具（市販の物で可）を使います。指にはさむだけで使用できるので、抵抗感が少なくなります。

漢字の細部の違いが見分けられない場合

透明アクリル板を使用して、漢字学習ボードを作成し、教師がなぞるようにして書きます。漢字の書き順を教師の手の動きと重ねて見ること、真正面から実際に字が書かれる様子を見ることができ、書き順や形を認識しやすくなります。

6　不注意な間違いが多い

子どもの姿

　Ｆさんは、学校生活の中で、ぼんやりしているように見られることがよくあります。教職員の指示も聞いているような、聞いていないような感じです。授業中も、突然の質問に答えられなかったり、勉強しているところとは違うページを開いていたりすることがよくあります。テストでは、解答欄を間違えたり、筆算の位取りを間違えたりするケアレスミスが多く、実力通りの点数がとれません。

　担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、視力そのものには問題はありませんでしたが、授業中に黒板を視写する際に、行をとばして書いてしまったり、自分が今どの部分を書き取っていたのか混乱したりすることもあるようです。

考えられること

Ｆさんの姿から考えられることとして、

◇注意力、集中力に課題があり、複数の情報刺激の中から、必要なものだけを取り出すことができにくい。

◇衝動性があるために、早合点して判断して行動してしまう。

◇視知覚に課題があり、「見て、それを書き写す」といった協応動作が難しい。同時に複数の処理が難しい。

などが挙げられます。そのために、書く活動、特に見て書く活動において、ケアレスミスが出やすいと考えられます。そして、

◇自分の行動を振り返って確認することができないために、間違いに自分で気づいて訂正することは難しい。

と予想されます。また、

◇家庭での生活について、睡眠時間や食事などの生活リズムや習慣作りなどにつまずきがある。

◇黒板が見えにくい席にいる、板書がごちゃごちゃして見づらい、テスト等の記入欄が小さい、テストの問題が本人にとっては見にくいなど、環境面で問題がある。

といったことも要因として考えられます。どこに課題があるのかしっかりと実態をよく把握し、分析することが必要です。

指導目標

〇確実に板書の内容をノートに書き写すことができる。
〇正しく書き写せているか自分で確認することができる。

目標達成のための指導・支援

- 本人のためだけではなく、他の子どものためにも、簡潔に整理された見やすい板書を日頃から心がけることが大切です。
- ノートやワークシートには、マス目等の罫線の入ったものを用意することが有効です。
- 視知覚については、必要な検査等を行うなどして「視覚ー運動」について詳しく調べることが大切な場合があります。
- テストやワークシートについては、本人が見やすく、また情報を選択しやすくなるように、１枚の用紙に掲載する情報量を減らしたものを用意します。例えば１枚の問題用紙に１～３問、数ページの冊子にするなど、本人に合ったものを検討します。答案用紙も位取りを意識しやすくなるような罫線等の入ったものを用意するとよいでしょう。
- いろいろな学習活動において、作業を終えたら、きちんとできているか必ず自分で確認する習慣をつけることが大切です。ノートをとる際に、はじめは隣の友だちと協力するなどして、行をとばしていないかなど確認することを習慣づけていきましょう。

7　最後まで話が聞けない

子どもの姿

Ｇさんは、一つのものごとに集中しつづけることが困難です。一つの課題に取り組んでいる時間は 10 分程度で、すぐ次のものに興味が移ってしまいます。

担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、授業中も、教職員の質問が終わらないうちに、出し抜けに「〇〇だ。」と答えてしまうことが多く、問題の途中なので的外れの答えになることもあります。話を最後まできちんと聞いて、ゆっくり考えてから答えるように、と言い聞かせて指導していますが、なかなかその気持ちを押さえられないようです。

考えられること

Ｇさんの姿から考えられることとして、

◇衝動性が強く、行動や欲求の抑制が難しいため、思いついたことをすぐ行動に移してしまう。

◇周囲の状況を読む力が乏しく、自分の言動を周囲の人がどう思うかなどを考えることが難しい。

◇自分の言動が周囲の人にどんな影響を与えたかなど、自分で自分のことを振り返ることができにくい。

などが挙げられます。そのために、出し抜けな発言につながっているものと考えられます。そして、

◇「手を挙げて、指名されてから答える」といった学習規律やルールが理解できていない。

といった可能性もあり、その理解を促す指導等が必要となる場合があります。

Ｇさんの場合は

◇理解しているが、つい、どうしても衝動的に行動してしまう。そのために、学習規律やルールを守ることが習慣化できていない。

という可能性が高いのではないかと考えられます。また、

◇周囲の刺激に反応しやすい。

◇次にすることは何か、どこまでやれば終わりかなど活動に見通しを持ちにくい。

などの要因もあるために、活動への集中ができにくくなるようです。

指導目標

〇短い話を最後まで聞いてから行動することができる。
〇授業中の発表のきまりを守って答えることができる。
〇スケジュール等を手がかりにして、課題に最後まで取り組むことができる。

目標達成のための指導・支援

- 「手を挙げて、指名されてから答える」という発表のきまりを本人に丁寧に指導して理解させることが必要です。また、クラス内の他の子どもにも徹底することが大切です。
- 発表のきまりを書いたカードを本人の机上に置いておくことも効果があります。同様に教室内にも掲示しておくことで、クラス内のルールの徹底にもつながると考えられます。
- もしもきまりが守れなかった場合は、その都度、毅然とした指導をすることが大切です。「聞く」「すわる」と書いたカードなど視覚的な手がかりを使ってその場の状況や行動を即座に示すことにより、本人が自分の行動を制御しやすくすることもできると考えられます。
- ソーシャルスキルトレーニングやロールプレイ等を通して「話の聞き方」「話のしかた」を学習することも有効でしょう。
- 課題への取組については、スケジュール（手順書）を作成して提示し、課題が終了したら自分で線を引いて消していくなどして、見通しが持てるようにします。スモールステップで課題を用意し、やりとげたらスタンプシールをもらって確認する、課題を１つ→２つ→３つ…と組み合わせていき、取り組むことのできる時間をしだいに増やすようにするなど、本人に合った工夫をします。
- 活動中にがまんできなくなるなどした場合には、手を挙げて教職員にそのことを伝えるとよいことなど、困った時の方法と約束を決めておくと、安心して取り組むことができます。
- 例えば係の仕事として、授業中にプリントを配るなど何らかの仕事を与え、体を動かせるようにすることも有効です。

8　苦手な活動に取りかかりにくい

子どもの姿

Ｈさんは、体育の時間に、跳び箱などの本人が嫌いな運動をするときには、なかなか体操服に着替えられず、授業の開始時刻に間に合わないことがあります。

担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、友だちの様子を見るまでもなく、着替えをしなくてはならないことはよくわかっているようです。　しかし、教職員から再三個別の口頭指示があるまで着替え始めることができず、友だちが体育館に行った後にぶつぶつ独り言を言いながら一人で着替えはじめることが多いようです。ただし、体育の時間終了後の着替えはとても早く、声かけが無くても素早く着替え終わることができるようです。

考えられること

Ｈさんの姿から考えられることとして、

◇跳び箱は難しいと感じている。
◇どうやったら跳べるようになるのかわからない。
◇「自分はきっとできないだろう」と思い込んでいる。
◇できないことに挑むことが苦痛である。できないことが悔しい。できない自分が許せない。
◇友だちに見られることが恥ずかしい。「きっと友だちは自分のことを笑うだろう」などといった思い込みがある。
◇跳び箱の活動は体力的につらい。

といったことが内面にあるのではないかと予想されます。そして、

◇身体の動きに関して、不器用さがあり、体を動かすことが苦手。
◇自分の中で負の考え方や思い込みにとらわれてしまっている。
◇成功経験が少なく、自己肯定感が低い。
◇自信のないこと、どうしたらよいかわからないことに取りかかりにくい。
◇自信のないことに取り組む意欲に乏しい。
◇友だちとの関係づくりがあまりうまくいかない。
◇コミュニケーション能力が乏しく、自分から相手に気持ちを伝えにくい。
◇困ったときに、周囲に助けを求めてよいのかどうか判断できない。

などの課題もあるものと考えられます。

指導目標

〇成功体験を積み重ね、自信を持ち、新しいことや困難なことにも挑戦しようとすることができる。

〇嫌な気持ちや困っていることなどを教職員や身近な人に伝えることができ

目標達成のための指導・支援

- 苦手意識の強い活動については、活動内容を変えたり減らしたりするなど、負担感を軽減できるような配慮が必要です。例えば、運動の苦手な子どもに対しては、選択できる活動を設定する、楽しい活動から始めるなど、意欲を持ちやすくなるような授業展開を工夫することも大切です。
- 本児の得意なこと、好きなことをよく調べ、学習活動等に意識して取り入れていくようにします。できたことをその場で称揚する、クラスの友だちにも紹介するなどして、本人が自信を持てるようにします。得意分野での力や自信を高めることによって、苦手なことや努力を要することにも取り組んでいこうとする意欲や活力につながっていくと考えられます。
- 友だちにも本児の良さやがんばりが伝わるようにして、多様な存在を認め合い、多様な価値観を大事にする集団づくりに努めます。本児を温かく受け入れる集団の雰囲気によって、周囲の目を気にして活動に対して消極的になっている現在の状況が少しずつ改善していくと思われます。さらに、本児を支えてくれる友だちができるように教職員が仲立ちをして働きかけていくことも必要かもしれません。
- 本児が困ったときに自分の思いを伝えられるようになるには、まずは、担任との人間関係づくりが肝要です。本人に受容的に関わること、本人の良さや小さながんばりをとらえて適切に評価し、称揚することが大切です。友だちの前でほめるだけではなく、さりげなく声をかけてほめる、ノート等へのコメントでほめる、アイコンタクトでほめるなど、本人に伝わるよう様々な方法で称揚します。「先生は自分のことをよく見てくれている。認めてくれている。」という思いが持てるようになると、支援を求めたり、悩みなどを打ち明けたりしやすくなります。
- そして、教職員に支援を求めてもよい場面を具体的に教え、その方法について相談します。困ったときのサインについて、学級の中で教職員に伝えることができにくいようであれば、教職員が気づくことができるように小さく挙手する、困っていることを示すカードを机の上に出す、隣の友だちに告げるなど、その子どもにとって一番取り組みやすい方法を一緒に考えます。

9　忘れ物が多い

子どもの姿

Ｉさんは、宿題や提出物などの忘れ物がとても多く、教職員から注意を受けても「ついうっかりして・・・」と言って、その都度、反省はしているようですが、その後も宿題や持参物等の忘れ物は減りません。保護者あての配布物も家庭で見せるのをよく忘れてしまいます。提出物もなかなか期日通りに出せません。

担任の観察をもとに校内で情報収集と検討をし、こまめにメモを取るように指導しましたが、メモを取っても活用できていないため、なかなか忘れ物は改善されません。

考えられること

Ｉさんの姿から考えられることとして、

◇記憶力が弱い。

◇注意力が散漫で、集中できにくい。

◇様々な刺激に反応しやすく、気になることがあるとそちらに夢中になってしまう。

などが挙げられます。そして、

◇持ち物について、きちんと準備する、確認するなどの習慣が身についてない。

といったことや、

◇本人だけの問題でなく、保護者の問題意識も不十分かもしれない。

◇学校と家庭との連携が十分にできていない。

といった課題もあるかもしれません。

指導目標

○必要なメモを取り、家に帰って活用することができる。

○次の日の準備を確実にすることができる。

目標達成のための指導・支援

- 帰りの会の時間などで、メモを取る時間を可能な限り十分に確保し、落ち着いて書くことができるようにします。書く分量が多くなると負担が大きくなる場合、メモの内容を理解できる範囲で省略して表記するなど、本人と確認しながら工夫します（例：「国語」→ 国 、「習字道具」→ 習 ）。
- 注意集中に課題がある場合、板書を確実に書き写すことができたかどうか、教職員が確認する必要があると考えられます。
- 連絡袋に、その日の配布物を入れたかどうか、教員や隣の友だちと一緒に確認するようにし、習慣化を図っていきます。連絡帳に毎日配布物の数を確実に書くようにすることも効果的でしょう（例：「手２」…手紙２枚の意）。重要な手紙や急ぐ物については、本児とともに封筒に入れたり、目立つシールを貼ったりするなどして、「渡さないと…」という気持ちを高めるようにします。
- メモ（あるいは連絡帳）をランドセルのどこに入れるか決めておき、定着するまでは教職員が確認するようにします。
- 忘れ物がなかったときには、しっかりと称揚します。成功経験を積み重ね、自信を持てるようになることも大切です。また、ごほうびシールなどで意欲を高める工夫も効果的であると考えられます。
- 保護者に本人の課題を十分に理解してもらった上で、協力してもらいます。メモ（または連絡帳）が所定の場所に入っていたか、自分で出せたか、きちんと書けていたか、配布物が書いてあった数だけ入っていたかなどを確認してもらいます。次の日の支度をする時間や場所を決めて習慣化すること、本人がメモを必ず見て準備をすること、保護者が最終点検することなどについても、共通理解の上で協力してもらうようにします。
- 家庭での環境を整え、学習用具などの置き場所を固定化し、置き場所にその用具の名前を貼るなどの工夫をしてもらいます。また、例えば国語であれば何が必要なのか（例：国語の教科書、ノート、漢字ドリル、漢字練習帳など）わかるように対照表を机に貼っておくことも効果的です。また、準備物を実物大の写真で示した「準備シート」を使って、毎日必要な物、各教科で必要な物などを自分でより確実に準備する方法も考えられます。
- 朝、家を出る前に持ち物をチェックできるように、持ち物の一覧表を玄関など見やすいところに掲示しておき、自分で確認する習慣をつけることも必要です。

10　相手の気持ちを考えずに行動してしまう

子どもの姿

Ｊさんは、遊んでいるときに順番を守ることができず、友だちが並んでいる列に割り込んだり、友だちが使っている物を横から急に取ったりすることがあります。それが原因で、けんかになることがありましたが、その原因が自分の行動にあるということがすぐにはわからない様子でした。

担任の観察をもとに校内で情報収集をするとともに、「きまり」について本人に尋ねると、「順番は守ります。」「借りるときはちゃんと言ってから借ります。」と、どうすればよいかをひととおり答えることはできましたが、実際には守れていないことの方が多いようです。

考えられること

Ｊさんの姿から考えられることとして、

◇相手の気持ちを考えることが苦手。

◇衝動性が強く、行動や欲求を制御することが難しく、思いついたことをすぐ行動に移してしまう。

◇状況に応じたコミュニケーションの方法が身についていない。

◇自分の言動を振り返ることができにくい。

◇きまりを守ることの意義が十分にわかっておらず、「順番を守る」ということばは知っているが、意味を理解していない。

◇待つことや我慢することが苦手。

などが挙げられます。その他に、

◇友達とのトラブルが多いために、叱責を受けることも多く、ことばで自分の気持ちを伝える前に手が出やすくなっている。

◇気持ちがイライラしやすくなる出来事等があった場合には、その後の行動に影響しやすい。

といったことも考えられます。

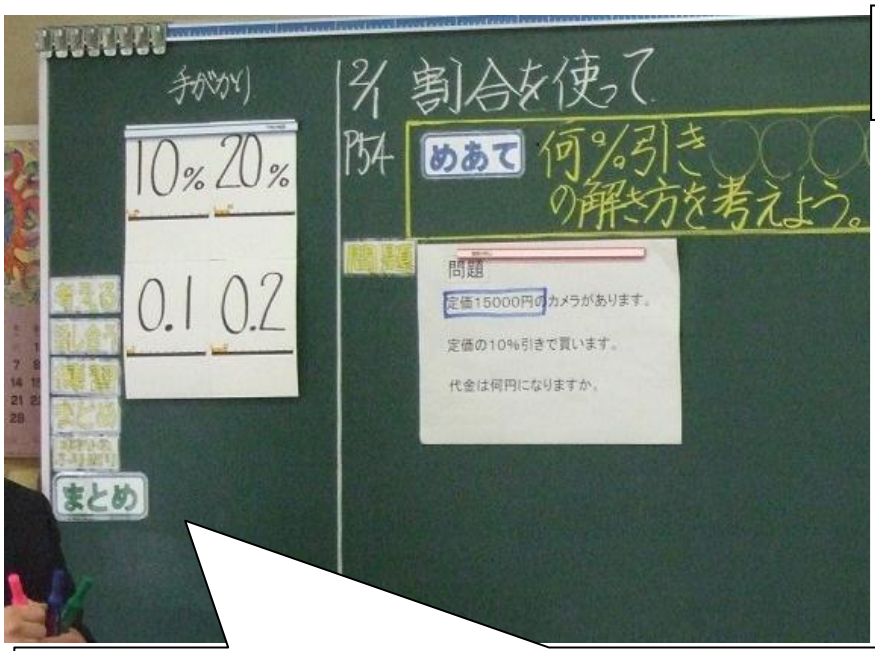
指導目標

〇遊ぶときの約束を守って遊ぶことができる。
〇友だちが持っている物を借りるときの約束を守ることができる。
（「貸して」と頼む、「いいよ」と許可をもらってから使うなど）
〇困ったときやしたいことがあるときなどに、適切な方法で相手に気持ちを伝えることができる。

目標達成のための指導・支援

- ロールプレイなどを意図的に設定し、「貸して」→「いいよ」のやりとりや、順番を守って一番後ろに並んで待つといったことを経験できるようにします。逆の立場で、割り込みなどをされると嫌な思いをすることも経験しながら、相手の気持ちを考える機会を持つこともよいでしょう。
- 実際に遊び場で待つことができている場合など、しっかりと称揚することが大切です。守れたことを自信につなげたり、取組の意欲を高めたりするために、がんばりカードにごほうびシールを貼るなどの工夫も考えられます。
- もしも本人が約束を破ってしまっても、厳しく叱るばかりではなく、受容的な態度で受け止め、自分の行動を振り返り、自分の行動が相手にどのような影響を与えたかを考えることができるようにし、どうすればよかったのかをわかりやすく伝えます。そうすることの積み重ねが、自分の行動を制御できるようになるきっかけとなります。教職員の対応の仕方としては、一貫して同じような態度で冷静に接するようにし、してはいけないことをきちんと伝えながら、本人が混乱しないように配慮することが大切です。
- そのときの状況を振り返る際に、イラストや図などに表しながら説明した方が伝わりやすい場合があります。話したことやしたことなどを教職員が時系列に図に描いて示したり、吹き出しに自分や相手の気持ちを書き込んだりしながら、事実を確認し、それを手がかりにしながら、話を聞いたり、振り返ったりすると効果的です。
- 伝えたいことがある場合に、カードを出すなど、相手に伝える特定の合図（方法）を決めておきます。その合図があると、教職員が本人とやりとりして気持ちを聞き取るという様子をクラスの子どもたちに見せることによって、他の子どもたちにもその方法を受け入れられるようになっていきます。

支援の工夫コーナー



わかりやすい板書を心掛ける

見やすく、わかりやすい、簡潔に整理された板書をすることによって、学級のどの子どもにとっても理解しやすい授業につながります。
黒板には必要以外の掲示物や磁石等を貼らないようにします。黒板の周囲の掲示物についても、必要最小限のものに絞ります。

この板書では、教科書のページ、今日のめあて、既習事項で手がかりとなること等を簡潔に示しています。また、黒板を分割して使い、授業の流れがわかりやすくなるような工夫もしています。チョークの色や、四角囲み、下線などの使い方やルールを統一しておくことで、理解しやすくなります。また、「考える」「話し合う」「問題」「練習」「まとめ」など活動の見出しを記したカードを毎回用いることで、今している活動の内容や意味等が一層わかりやすくなります。

毎日使う物の準備シート

物を用意する時、入れ忘れてしまう場合

家庭で準備をするときに準備シートを参考にします。準備物を写真で実物大に示した準備シートを使い、実際にその上に置いて確認します。毎日使う物、教科で必要な物というように、順番に具体的に用意することで、自分で確実に準備ができるようにします。

手洗い場で順番を守ることができにくい場合

この写真では、手を洗っている人の後ろに並ぶ人の立つ位置を、ビニールテープで示しています。印が目に入ることで、人から言われるのではなく、「ここで待てばいいんだな。」と、自分で「順番」「待つ」といったことを意識しやすくなります。

11　こだわりが強い

子どもの姿

　Ｋさんは、バッタやダンゴムシが好きで、虫博士として一目置かれていますが、休み時間にバッタ探しに夢中になり、チャイムが鳴っても教室に戻ることが難しいようです。また、バッタを探して友だちの植木鉢を倒したり、植木の枝を折ったりしてしまうことがたびたびあります。

　担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、捕まえたバッタやダンゴムシはポケットに入れて教室に持ち込むことが多く、授業中でもポケットに手を入れてゴソゴソと遊んでいることがしばしばあるようです。また、捕まえたバッタを教室に持ち込もうとするのを友だちに止められると興奮してトラブルになることもあります。

考えられること

Ｋさんの姿から考えられることとして、

◇興味に偏りがある上に、夢中になると周囲が見えない（聞こえない）状態になり、他のことが頭に入らなくなる。

◇好きなことをしていると、なかなかやめられない。

などが挙げられます。また、

◇してよいことといけないことの区別ができにくい。

◇自分がしたいことの抑制ができにくい。

といったことから、規範意識が低くなり、学級のルールを理解することが難しいと考えられます。さらに、

◇がまんすることが苦手。

◇衝動性が強い。

◇感情表現や気持ちの伝達が未熟である。

などのために、自分の思い通りにならないとパニックになりやすいと考えられます。

指導目標

〇きまりを守って生活することができる。
〇チャイムの合図を守って生活出来る。
〇感情をコントロールして、思いを伝えることができる。
〇自分の気持ちを落ち着かせる方法を身につける。

目標達成のための指導・支援

- 休み時間など好きなことができる時間を確保した上で、どのようなルール（場所や時間、遊び方等）にするか、本人と約束します。例えば、「虫を教室に入れる時には虫かごに入れる。」、「授業中は棚の上に置いておく。」「虫取りをするときに入ってよい場所といけない場所を決める。」などです。
- チャイムが鳴ったら、友だちや教職員からの声かけも手がかりにして、着席することを徹底していきます。その際には、友だちからの声かけとして、「教室に入ろう」と直接的に行動を指示する言い方ではなく、チャイムが鳴ったことを伝えるようにした方がよいと思われます。チャイムの合図を守ることができたら、しっかりと称揚することが大切です。
- 自分の「イライラ度」を数値化し（例：１～５の５段階）、教職員に伝えることができるようにしておきます。さらに、「イライラ度」に合わせたクールダウンの仕方（例：「深呼吸する」、「先生に聞いてもらう」、「廊下に出る」、「別室に行く」など）を相談しておき、自分から教職員に伝えることを習慣化します。
- トラブルが生じたときには、必ず状況を本人とともに振り返り、何が原因で、どうすればよかったのかなどを考えることができるように説明します。その際は、状況を絵に表し、友だちの気持ちを吹き出しにして視覚化するなど、その場に応じた言動に気付くことができるようにします。
- 虫への直接的な関わりから、理科の学習や、虫を介した友だちとの遊びなど、興味関心に沿った活動を手がかりにして、活動の幅がさらに広がるように働きかけることも必要でしょう。

12　過敏なところがある

子どもの姿

　Ｌさんは、大きな音や人混みの雰囲気などが苦手です。通学路にいる犬の鳴き声や、商店街から聞こえてくる音楽の大きな音を聞くと、とても不安になり、耳をふさぎ、周囲の危険を考えることもなく、突然その場から走り出してしまうこともあります。

　担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、校外学習や行事に参加した翌日は、学校を休むほど疲れてしまうそうです。偏食も多く、着ることのできる衣類などの材質も限られています。

考えられること

Ｌさんの姿から考えられることとして、

◇聴覚、触覚、味覚などの感覚が過敏で、感覚刺激に対してがまんできないことがあり、情緒的に不安定になりやすい。

◇普段と違う活動（学校行事や慣れない場所等）に対応できにくく、ストレスをためてしまう。

◇コミュニケーション能力が未熟で、困っていることや自分の気持ちなどをことばで相手に伝えることができにくい。

などが挙げられます。また、

◇苦手な刺激のある状況を回避する方法を身につけていないために、日常的に不安感や抑うつ感を抱いている。

◇自分のことを分かってもらえないと感じて、対人関係でも消極的になりがちである。

◇いろいろなことに自信を失っている。

などの二次的な問題も生じているかもしれません。

指導目標

〇困ったときに、自分の思いを伝えることができる。
〇感覚面で耐えられない状況のときに、自分で対処する方法を身につける。

目標達成のための指導・支援

- 大きな音などに対して本人がとてもつらいという事実を教職員や友だちに十分理解してもらうことが必要です。
- 集団での活動の際は、必要以上に大きな音の使用は避けて音量を落としましょう。座席や整列位置をできるだけ音源から遠くするなどの配慮も必要です。
- 大きな音が予想される場面では、本人に予告しておき、必要であればあらかじめイヤーマフ（耳あて）を使用するなどして、心配なく活動できるようにします。
- 大きな音に慣れさせるように訓練することや、耳ふさぎをやめさせるなどの無理をさせることは避けるようにします。
- 大きな音など苦手な刺激があるときには、自分で「いやだ」と教職員や周囲の友だちに適切に伝えることができるように指導します。その際、学級内の十分な理解があることが前提となります。
- 音楽の授業などで、どうしても耐えられない場合には、別室などで心を落ち着かせることができるように決めておき、その要求を挙手等で教職員に伝えるようにします。
- 自分で申告することによって苦手な状況から回避できるという安心感があることで、苦手なことに立ち向かってみようという気持ちが芽生えることもあります。絶えず不安な状況下では、苦手なことに耐える力は、持っていても十分に発揮できにくいものです。
- 大きな音のする通学路を無理して通らなくてもすむように、保護者と相談することも必要かもしれません。

13　気持ちが切り替えられない

子どもの姿

書道が好きなＭさんは、書写（毛筆習字）の時間に思ったような清書がなかなか書けないために、他の友だちが清書を提出して片づけを終えても、途中で終わることができません。片づけの指示を聞き入れることが難しい上、やむを得ず提出した清書の出来にこだわり、その後の授業にも身が入りません。

担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、他の授業でも、納得できないときには次の学習への気持ちの切り替えが難しく、ぶつぶつ言ったり口を荒らしたりすることが多く、学級全体の活動に影響を与えることがあるようです。

考えられること

Ｍさんの姿から考えられることとして、

◇同一性への固執が強く見られ、思い通りにならないと次へ進むことができにくい。

◇几帳面で完璧主義である。

◇自分なりの方法や手順をくずすことができにくい。

◇好きなことに集中すると他のことが目に入らなくなる。

◇プライドが高く、友だちと比べて劣っていると思われることがいや。

◇「○か×か」、「白か黒か」といった二者択一的な思考をしがちで、柔軟な考え方ができにくい。

◇感情のコントロールができにくい。

などが挙げられます。さらに

◇コミュニケーション能力が未熟で、気持ちを適切に伝えることが苦手。

◇周囲の友だちの気持ちを読むことも苦手。

といったことも考えられ、クラスの中で友だち関係に問題が生じている可能性もあります。

指導目標

〇「完璧でなくても大丈夫」という気持ちを育てる。
〇チャイムや時計などを手がかりに、している活動を切り上げることができる。
〇自分に合った目標を教職員と設定し、目標を達成したら活動を終えることができる。

目標達成のための指導・支援

- 本人が得意なこと（この場合は書道）をしっかりと評価し、100 点（100%）でなくてもよいということ、完璧でなくてもよいことを指導の中でたびたび知らせるようにします。書写の活動中も机間巡視しながら、しっかりと称揚することで、出来ばえに対する満足感を高めるようにします。
- 教職員のスタンスとしては、「完全に仕上げたい」という本人のこだわりをよいこととして評価し、まずは、その性格や特性を受容的に認めることが大切です。そして、完璧でなくても折り合いをつけようと自分から努力する姿勢が見られたらしっかりと称揚することが大切です。
- 出来ばえに対する満足度を教職員が読み取り、「がんばったけど納得できないんだね。」、「もう少し続けたいんだね。」などとことばをかけてあげることが大切です。教職員が十分共感して言語化することにより、本人が自分の気持ちをことばで表現することへとつながっていく契機となります。
- さらに、いつ書き直しをするかについて、「そのまま続けて（休み時間）」、「昼休み等の他の自由時間」、「放課後」、「宿題として」「次週の習字の時間」などの選択肢のうち可能なものを教職員が提示して、相談するようにします。いつならできるかを、はっきり分かるように示して選択させることで、自分でも切り替えようという気持ちにつながりやすくなると思われます。
- 終了の時刻をあらかじめ知らせておいて、その時刻の 10 分前、５分前になったら知らせるようにすると、時間に見通しを持つことができ、あと〇枚のうちで清書を選ぼうなどと自分に折り合いをつけやすくなります。
- 本人の作品を学級の子どもたちの前で称揚するとともに、授業中に切り上げることができたこと、他の時間によりよい作品を目指して頑張ったことについても紹介し、学級の子どもたちの理解を深めていくことが大切です。

14　学校行事や集会活動が苦手

子どもの姿

Ｎさんは、全校集会や終業式などでは、会場である体育館には行くものの、しだいに落ち着きが無くなり、教職員が注意をすると口を荒らすなど反抗的になり、周囲の友だちを誰彼かまわずたたいたり蹴ったりします。暴力をふるわないよう指導をすると、体育館を飛び出して逃げ、注意をしても会場に戻ることは難しいようです。

担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、そうした際には会場の外の物の陰などに隠れてはいますが、常に教職員に見つけられやすいところにいるようです。

考えられること

Ｎさんの姿から考えられることとして、

◇体育館など広い場所が苦手で、落ち着かない。

◇刺激に対して過剰に反応してしまうので、ざわざわした雰囲気や刺激の多い環境が苦手。

◇（あるいは）整然とした雰囲気が苦手。

◇集会等の流れや終わりがわかりにくく、見通しのなさから不安になる。

◇コミュニケーション能力が未熟なため、自分の思いをうまく伝えることができにくい。

◇衝動性が高く、がまんをすることが難しい。

◇感情のコントロールが難しい。

などが挙げられます。また、

◇友だちに手を出したり、暴れたりすることで、その場から逃げられるという経験を繰り返し、誤学習をしてしまっている。

◇落ち着かなくなると、周囲の気をひきたくなり、これまでの経験の繰り返しから、癖になっている。

といった二次的な課題もあるかもしれません。

指導目標

〇見通しをもって、落ち着いて集会等に参加できるようになる。
〇困ったときなどに自分の気持ちを適切に伝えることができる。

目標達成のための指導・支援

- 聴覚刺激に対して過剰反応してしまうのであれば、イヤーマフ（耳あて）を用いるなどして、刺激の調整を行い、集会等に参加しやすくなるように負担を軽減します。
- 視覚的にわかりやすいスケジュール表やカード等を手元に用意し、集会の活動内容や流れ等を理解できるようにします。さらに、手元のスケジュール表やタイムタイマー等の機器を使用しながら、あとどれくらいで終わるのかを伝えるようにします。見通しを持つことができると、不安やイライラした気持ちが軽減されます。全体向けに、スクリーンや大型テレビ画面などに、視覚情報として提示することも有効です。
- 教職員が近くに寄り添い、不安定になる前に声をかけ、がんばりを認めたり励ましたりするようにします。
- 困った場合に、意思表示カード（「つらい」「外に出たい」等）を使って教職員に気持ちを伝える、挙手して教職員に伝えるなど、本人の取り組みやすい方法で、ＳＯＳを伝えることができるようにします。
- また、「今日は〇分間、がんばる」など、無理のない範囲で自分なりの目標を持たせた上で参加し、少しずつ目標時間を延ばしていくようにすることもよい方法です。がんばれたことを必ず称揚し、自信を持てるようにすることが大切です。
- これまでの経験から、暴れることで退出できると誤学習をしているのであれば、今後は、手を出す前に止めるなどして、その行動によって望んでいる結果をもたらすことがないようにして、適切な対処法について改めて学習をし直すようにします。

15　孤立しがち

子どもの姿

　Ｏさんは、友だちが少なく、友だちと一緒に遊んだり活動したりすることがあまり見られません。自分から友だちに近づいていったり、話しかけたりすることも少なく、休み時間は自分の好きな本を読んだり、絵を描いたりしていることがほとんどです。友だちが遊びに誘っても絵を描き続けているので、だんだん声をかけられなくなってきました。

　担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、授業中のグループ活動では、友だちの様子を見ながら行動していたり、何をするのか細かく指示されないと活動できなかったりするようです。

考えられること

Ｏさんの姿から考えられることとして、

◇社会性が乏しく、人と関わることが苦手。

◇コミュニケーション能力が未熟で、わからないことなどを人に尋ねることが難しい。

◇自由にしてよい時間やあいまいな状況においては、何をしたらよいか判断できにくい。

◇一斉指導や全体への口頭指示では活動内容等が理解できにくい。

◇活動の見通しが持ちにくい。

◇聴覚的な情報処理より視覚的な理解の方が得意。

などが挙げられます。また、

◇周囲の友だちから距離を置かれたり、孤立しがちになったりしている。

といったことにより、一層本人が集団の輪に入りにくい悪循環の状況にあることも予想されます。

指導目標

○困ったときに自分の気持ちをことばで相手に伝えることができるようになる。
○わからない時に教職員や友だちに尋ねることができる。

目標達成のための指導・支援

- まずは、本人を受け入れられる集団づくりをすることが必要です。グループ活動をするときのグループ編成時には、本人のことをよく理解している子どもを入れるようにします。さらに、グループの友だちに本人の特徴について説明したり、本人がうまく気持ちを伝えられないときに教職員が仲介したりすることも必要です。グループ内で温かく助けてもらえる環境にあることで、本人が他者に働きかけようとする意欲を高めることにつながると思われます。
- グループ活動の指示を含め、一斉指導を行う際には、教職員の指示内容をできるだけ短いことばで端的に伝えること、プリントに話し合いの内容や方法を記すなど視覚的な支援を伴って伝えることが大切です。また、全体指示をする際には、本人を含め全員が聞く態勢になっているか確認してから話すなどの配慮が必要です。グループ活動時には、グループ内の役割分担をはっきりさせてから、活動を始めます。本人が見通しを持って活動に臨むことができるようになり、受ける支援も少なくてすみます。
- 尋ねたいことがあるときには、手を挙げるなどきまりを作り、グループの友だちにも、聞いてあげる、教えてあげるなど必ず応じるように話しておきます。困ったときにどうすればよいかを決めておくことで、本人も安心して活動に取り組むことができます。

16　予定の変更が苦手

子どもの姿

　Ｐさんは、２学期に入って数日してから、学校に行きたくないと言うようになりました。

　担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、運動会の練習のために時間割を変更した日には、登校をいやがる日が多いようです。正規の体育の時間は自分ですぐ体操服に着替え始め、授業にも普通に参加できます。しかし、時間割を変更して運動会の練習を行う場合は、どうも元気がなく、着替えにとりかかろうとしません。友だちが教室から出て行って自分が取り残されたことに気づいたり、友だちから声をかけられたりして慌てて着替え始めます。急に国語の授業の予定を変更して運動会の練習をすることになったときには、国語の用意を机上に出したまま、着替えようとしませんでした。

考えられること

Ｐさんの姿から考えられることとして、

◇決まったことへの固執性（こだわり）が強く、予定変更に対して見通しを持つことが難しい。

◇いつもと違うということに嫌悪感や不安感を持ちやすい。

◇予定の変更など、ことばによる説明だけでは、正しく情報を捉えることができない。

◇クラス全員に対しての口頭指示を、自分のこととして聞いていないことが多い。

などが挙げられます。また、

◇どうすればよいかわからないなど困ったときに、尋ねることができにくい。

◇周囲の状況を理解することが難しい。

といったこともあり、自分の力で解決できにくいものと思われます。

指導目標

○予定変更など、スケジュール表やカードなどを手がかりにして確実に理解することができる。
○困ったときに、教職員や友だちに尋ねることができる。

目標達成のための指導・支援

- 予定の変更はできるだけ前もって知らせるようにします。明らかな変更については、１週間のスケジュールとして事前に提示することが必要です。さらに、前日の予告、当日の朝の予定確認などにおいても説明しておくことが大切です。変更がある場合は、変更点や活動内容等をわかるように説明し、不安を解消できるように配慮します。やむをえない急な予定変更については、できるだけ丁寧に伝えることが必要です。
- 予定の変更については、教室内に掲示した一日のスケジュール表に色を変えて表示するなど、一目でわかるような工夫も必要です。そして、本人が必ず見て確認することが習慣化するまでは、教職員が声をかけて、表を見るように促します。
- 口頭で伝える際には、全員が聞くことのできる態勢づくりをする、本人に声をかけて注意を喚起するなどの配慮をしてから話すことが大切です。また、個別に紙に書いたメモを持たせることも有効な支援です。
- 変更の可能性があることについては、例えば「晴れたら運動会の練習」「雨なら国語の授業」といったように、前日から事前に伝えておくようにします。
- 困っていることがある場合に、友だちに声をかけやすいような席の配置やグループのメンバー構成を心がけ、周囲の友だちに、本人の特徴やどんなことを助けてあげることが必要かなどを伝えておくようにします。

17　係や当番の仕事が苦手

子どもの姿

Ｑさんは、係の仕事をしているときに、同じ係の友だちからよく注意を受けます。

担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、Ｑさんは動物が大好きで、意欲を持って生き物係に立候補しました。ところが、生き物係の仕事をする際に、しなければいけない一連の仕事の全部が済まないうちに、席に帰ってしまったり、雑巾を出しっぱなしにしていたりすることがあるようです。鳥小屋の新聞紙の敷物を取り替えていなかったり、えさを適量入れていなかったりと、うまくできていないこともしばしばあります。自分が当番の曜日をうっかり忘れていることもあったそうです。同じ係の友だちからは、「Ｑさんは無責任だ。」とか「世話をちゃんとやってほしい。」、「教えてあげたのに、すぐ忘れている。」などと厳しい指摘を受けることもありました。

考えられること

Ｑさんの姿から考えられることとして、

◇仕事の流れや内容などを覚えて、見通しを持って一連の活動に取り組むことが難しい（仕事の手順がよくわかっていない。）。

◇聞いたことを覚えるのが苦手。

◇状況から判断すること、友だちの行動から学ぶことなどが苦手。

◇どこまでやれば「ちゃんと」やったことになるのかがわかりにくい。

などが挙げられます。そのために、やる気はあっても、丁寧に十分な仕事をすることができにくいと考えられます。さらに、

◇遊びに夢中になると他のことを忘れてしまう。

◇何曜日が自分の当番なのか覚えることができない。

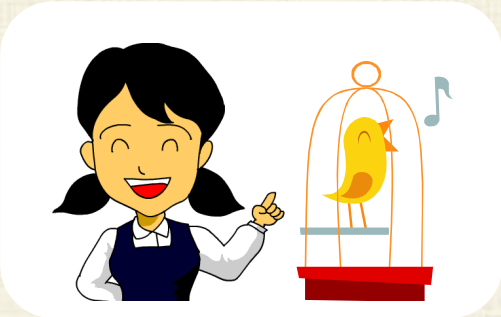
といったこともあり、やるべきときに仕事をしていないという理由で、係の友だちとの関係もうまくいっていないと思われます。

指導目標

〇仕事の手順を理解して、最後まで係の仕事をすることができる。
〇写真や図を手がかりにして、確実に作業をすることができる。
（例：えさの量、新聞紙の折り方や使い方等）

目標達成のための指導・支援

- 仕事の手順を視覚的にわかりやすく示し、見通しを持って仕事に取り組むことができるようにします。また、仕事の手順が一つ終わったら印をつけるなどして、どこまで進んだかわかりやすくなるように工夫します。
- 細かい作業内容について、視覚的にわかりやすいイラストや写真を使って示すことも効果的です。例えば、「えさの量はカップの赤線を引いたところまで入れる。」という場合には、そのカップの写真をラミネートして付けておきます。廊下のどこをどのように拭くのかわかりにくい場合には、図や写真で示したり、廊下にラインテープを貼ったりするなどの方法が効果的です。
- １週間のうち何曜日が自分の当番なのか、一覧表などにして目につくようにしておくことも必要です。また、交替で当番バッジを身につけておくなども、忘れないようにするための有効な方法になります。
- 仕事の手順を覚えるのに時間がかかる場合には、同じ仕事をたまにするのではなく、慣れるまではしばらく毎日続けて行うことが効果的です。さらに、同じ係の友だちに教えてもらいながら、仕事を覚えるようにすることで、連帯感も高まっていくと思われます。
- 係の友だち関係については、教職員が仲立ちしながら、受容的・協調的な集団作りに努め、失敗しやすい本人を支える関わりが生まれていくようにすることが望まれます。



18　時間の感覚が弱い

子どもの姿

Ｒさんは、休み時間が終わっても、砂場で延々と遊んでいます。

担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、好きなことに夢中になるとなかなかやめられず、終わりの時間を忘れて、活動し続けてしまうことがよくあるようです。無理にやめさせようとすると、とても不機嫌になってしまうこともあります。また、「〇時〇〇分になったら教室に集合しましょう。」といった教職員の指示に対して、自分で時計を見て判断している様子はなく、学級の友だちが教室に帰っていくのを見て、ついて行くようにしているようです。 詳しく確かめると、時計の針を見て時刻を読むことが得意ではありませんでした。

考えられること

Ｒさんの姿から考えられることとして、

◇感情や行動のコントロールが難しい。

◇口頭で時刻を言われても、時計の針を見て判断できない。

◇時計を読むことが苦手なため、時間を気にしたり、合わせようとしたりする時間感覚が育っていない。

等が挙げられます。そして、活動を終わるように告げられたときには、

◇あとどれくらい時間があるのか見通しが持てないまま活動していたため、急に終わりを強制されたように感じる。

◇好きなことを今度いつできるかなど、先の見通しを持ちにくい。

といったことがあるため、その場で行動を切り替えることができにくいという結果になっていると考えられます。

指導目標

〇終わりを意識して活動に取り組み、自分なりに納得して活動を終えることができる。
〇時計の読み方に慣れ、利用することができる。

目標達成のための指導・支援

- 終わりを意識できるように、「使っている材料がなくなったら終わり」とか「あと３枚書いたら終わり」などと、視覚的にもよくわかる示し方を心掛けます。
- 時間割表の中に、アナログ時計の時刻の絵およびデジタルの時刻を書き入れるようにして、時計を意識できるようにします。デジタルの時刻は「〇時〇〇分」と読むために使います、アナログ時計の絵は、長針の位置を確認して、目標の時刻に近づいてきたことを確認するために使います。実際のアナログ時計には、目標の時刻の長針の位置に、目立つ印を付けてきます。あるいは、本物の時計の横に、長針と短針の位置を目標時刻に合わせた模擬時計を置いておくことも有効です。タイムタイマーなどの視覚的にわかりやすい機器を用いることも効果的です。
- 活動に慣れてきたら、子ども自身が「（材料が）あと〇個まで」とか「あと〇枚」といったように、教職員と相談しながら終わりの目標を自分で決めるようにすることが大切です。時計の針も「ここまで」というように、活動に入る前に確認することが効果的です。
- 児童生徒の実態にもよりますが、時計の読み方に慣れるためには、初めは、５分ずつの目盛りの一般的な文字盤よりは、６０目盛りのアナログ時計を使用したほうが効果的な場合があります。

19　授業中に席を立ってしまう

子どもの姿

Ｓさんは、授業中などに自分の席を離れてしまうことがあり、教職員からよく注意を受けています。

担任の観察をもとに校内で情報収集をしたところ、授業中でもキャラクターの絵の付いたカレンダーや本棚の自動車図鑑に引きつけられるように歩いてしまいます。学校の外から電車の走る音が聞こえてくると、思わず立ち上がって廊下に出て窓から外を見ようとします。教職員の話も聞いているようですが、聞き漏らしや聞き間違いが少なくありません。離席した時に、教職員から席に戻るように促されると、素直に従うことはできますが、しばらく時間がたつと、再び同様の行動をとってしまいます。

考えられること

Ｓさんの姿から考えられることとして、

◇多くの刺激の中から、必要なものだけを選択することが難しく、周囲の様々な刺激に過剰に反応している。

◇注意集中が難しく、集中できる持続時間が短い。

◇衝動性が強く、行動や欲求をコントロールすることが難しい。思いついたことをすぐに行動に移してしまう。

◇多動性が強く、わかっていてもじっとしていることが困難。

などが挙げられます。また、

◇言語理解や聴覚記憶の弱さから、指示した内容を理解することが難しい。

◇全体指示が、自分にも向けられたものであることがわかっていない。

◇次の活動は何か、何をどこまですれば終わりかといったことについて、見通しを持ちにくい。

◇学習への興味関心が低い。

といったことも予想されます。

指導目標

〇授業中、<u>３０分間</u>集中して学習に取り組むことができる。

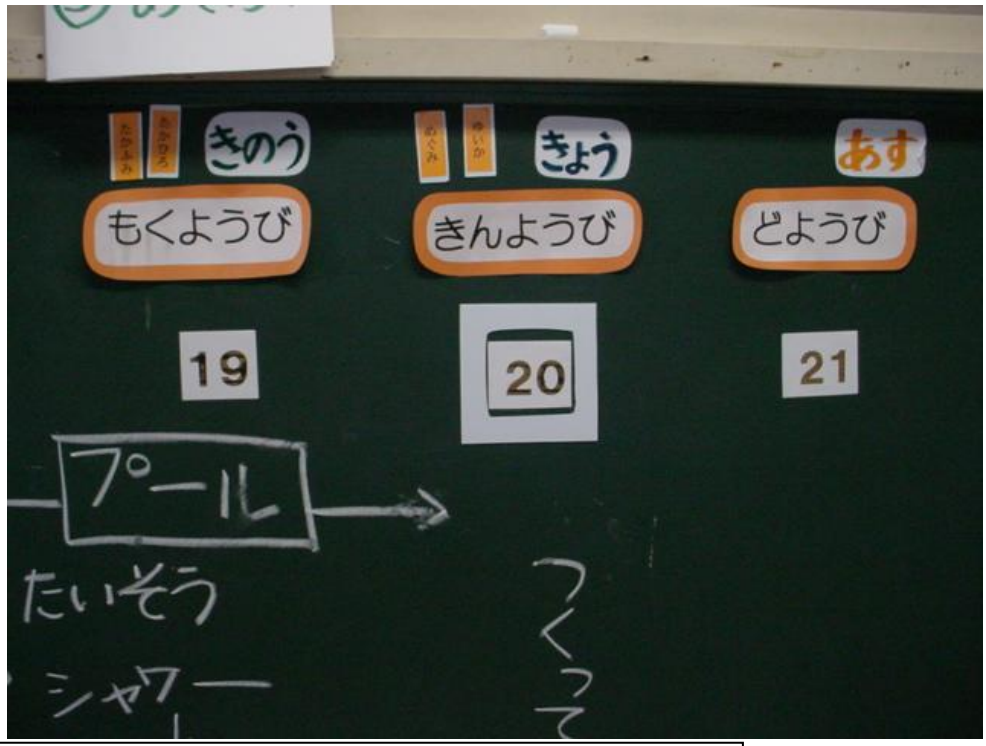
（時間は実態に合わせて）

〇がまんできにくくなったら、教職員に合図をして伝えることができる。

目標達成のための指導・支援

- 環境面で刺激の調整をする必要があります。不要な視覚刺激はできるだけ減らします。教室内の掲示物を精選し、特に黒板周りは必要最小限にします。本棚やテレビ画面等は布やカーテン、ついたてなどを用いて、使わないときには見えないようにします。
- 座席は、窓側を避け、一番前の席にすることで、視覚的な刺激が最小限になります。廊下に近い席は、人の足音や声などにも注意が向きやすくなるので、避けた方がよいと思われます。落ち着きのない子どもや、トラブルになりそうな子どもとは席を離します。また、授業中の行動のモデルとなる子どもや班活動でサポート役となるような子どもを近くの席にすることも効果的です。
- 授業の構成にも工夫が必要です。同じ活動を授業時間中ずっと続けるのではなく、例えば「読む活動」→「考える活動」→「書く（まとめる）操作的活動」→「発表する（見る・聞く）活動」といったように、各活動の時間を区切り、集中力が続きやすくなるようにします。
- 一斉指導の指示の際には、本人への個別の声かけなど、注意喚起できるような指示も合わせて行うようにします。そして、指示内容は端的かつ具体的なものになるように心がけます。図や絵などを用いて説明したり、視聴覚機器を有効に使ったりすることによって、興味関心を高め、集中力と活動意欲を向上させるとともに、理解の助けともなります。
- 本人と相談しながら、がんばる目標を立てます。初めはハードルを低くして「５分間、座ってがんばる」といった難易度の低い課題から始め、「10分」→「15 分」→…と徐々に時間を延ばしていきます。できたことをその場で十分称揚することが大切です。
- 本人をプリント配り係などに指名し、時々体を動かせるように配慮することも有効です。
- 持続ができにくくなったタイミングを見計らって、声をかけたり体に軽く触れたりして、気持ちの持続が途切れないようにします。教職員が軽く触れて手を補助しながら作業を完遂できるようにするなど、本人が「続けられる」と実感できる支援が有効です。
- 教室を出る際の手続きや帰ってくるまでのきまりなどを教えます。どうしてもがまんできないときには、挙手したりカードを用いたりして教職員に伝えるようにします。あらかじめ、教室外の行き先や相手をしてくれる教職員を教職員間で共通理解しておきます。

支援の工夫コーナー



日をまたいでの予定が伝わりにくい場合

その日だけではなく、週単位で予定を示し、行事のある日や前後の流れを示します。週単位で示すことにより、大きな時間の流れを子どもにわかりやすく示すことができます。また、明日、あさってのように、先の見通しを具体的につかみやすくなります。

時計を見て時刻を読めない子どもに目標の時刻をわかるように表示します。

時計の横に、時計盤を置いて、活動の切り替えの時間を知らせます。時計の針を見て「〇時〇〇分」と読めない子どもでも、長針と短針の位置を見比べて、気づくことができるようにします。

時計の長針が印のところに来たら、「かたづけ」、「おひるね」を始めることを示しています。

時刻（時計盤）入りの時間割表

			月	火	水
朝の活動	8:30		朝読書	朝読書	朝読書
	8:40		朝の会	朝の会	朝の会
1 時間目	8:50		国　語	算　数	国　語
休み時間	9:35				
2 時間目	9:45		算　数	社　会	体　育
業間	10:20				

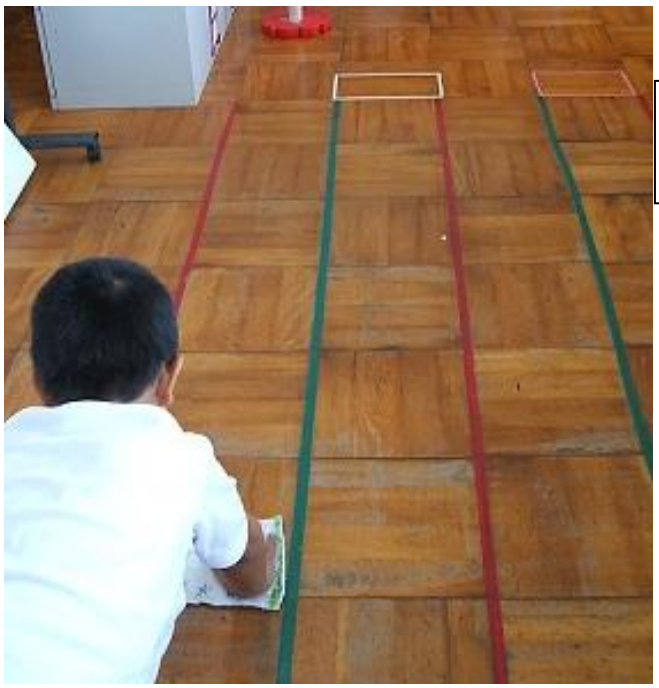
時計の針が読めない場合

掃除の開始時刻と５時間目の開始時刻を、文字で書いた時刻と、時計の文字盤の長針短針の両方で示しています。教室の黒板、運動場からよく見える場所などに大きく掲示しておくことで、昼休み中の子どもたちにもよく目に付きます。

支援の工夫コーナー

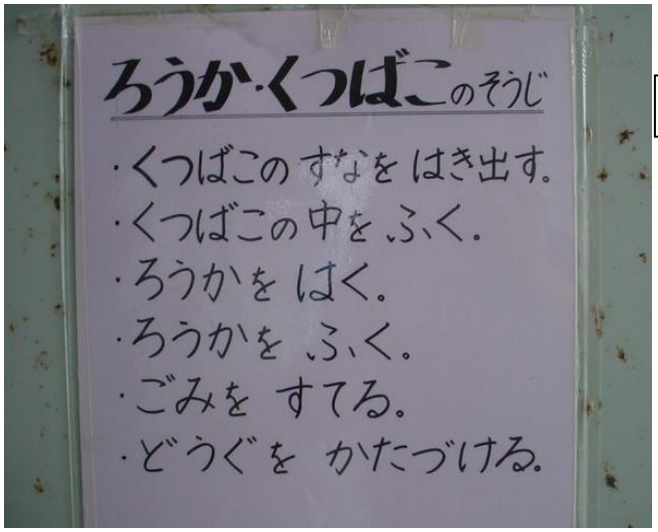
はきそうじの仕方がわからない場合

床にゴミを集めるところ（小さい〇印）を具体的に書いておきます。枠があると小さく集めるという意識が働き、具体的な指示をしなくても印の中に入れようとほうきをうまく使うことができます。遠くからも、その場所を目指してゴミを集めようとすることができます。



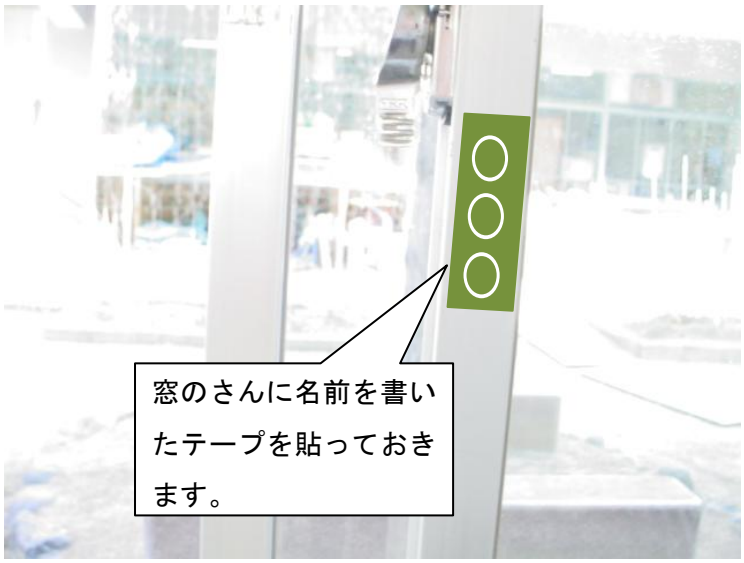
廊下の雑巾がけの仕方がよくわからない場合

廊下に色テープでラインを引いておき、その間をふくようにします。どこまでふいたか、あとどれだけふけばよいかなど見通しが持ちやすく、仕事に取りかかりやすくなり、最後までやりとげた達成感も持ちやすいと思われます。



掃除の手順がよくわからない場合

掃除をする順番を具体的に書いておきます。書いて示すことで見通しを持って活動に取り組むことができ、誰が当番になっても同じように掃除の手順を示すことができます。



自分の仕事が何なのか忘れやすい場合

自分で担当する係の場所を決めて、はっきりと名前を書いておきます。この写真は、「窓を開ける、閉める」といった作業の場合です。担当者の名前を書いておくことで、自分がする場所だとはっきりわかり、自分の仕事だという意識を強めることになります。

「朝の会」や「帰りの会」の司会の進め方がわかりにくい場合

司会の進め方を具体的に手順表で示します。１.「○○しましょう。」２.「△△しましょう。」３.「□□をはじめます。」のように誰もが同じようにでき、安心して言えるように司会のマニュアルを作っておきます。

掃除用具の片付け方が徹底しない場合

整頓された片付け方の例を写真でわかりやすく示します。ロッカーの扉に貼っておきます。

支援の工夫コーナー

おしごとめくりボード　（ウサギ当番の場合）

ゴムで止めたカードで、上から仕事の手順を示します。見通しを持って仕事に取り組むことができます。仕事内容をおちなくすませることができます。

できたら、カードを裏返します。文字の色が変わって「できたよ」の表示で、達成感をもって活動できます。複数名で活動している場合も進み具合を確認しやすくなります。

棚の中の物などが気になり、活動に集中できにくい場合

移動式のついたてを用意し、近くで気になる箇所を隠すように置きます。写真は、プラスチックのボードで作ったついたてです。

テレビなどの電気機器が気になる場合

さりげなく、布をかぶせて隠しておきます。そこにあることが分かっていても、つい目に入ってしまうかどうかが問題となります。

イライラしやすい子どもの場合

段ボール箱で作った隠れ家です。ちょっとクールダウンしたいとき、一人になりたいときなどに入ります。

中には、マットやお気に入りのクッションなどが置いてあり、ここで気持ちが静まることが多いようです。

支援の工夫コーナー

活動に集中しにくい場合

ひとつの教室をいくつかのスペースに区切り、場所と活動を対応させるようにしています。（その教室を使う人数が比較的少ない場合に実施しやすい形です。）

上の写真は、制作的な活動をする時に使うスペースです。

中の写真は、主に、歌ったり楽器を使ったりする活動の際に使うスペースです。
活動場所をこぢんまりしたエリアに収めることで、集中力がとぎれやすくなるのを防ぐ効果もあります。

下の写真は、落ち着きにくい子どもが使う専用の場所です。集団の中にいることがきつくなったときや、イライラするときなどにしばらく入り、クールダウンしてから集団の輪に戻るようにします。

とっさに手が出てしまったり、自分勝手な行動をしたりする場合

教職員がめくり式の視覚支援カードを携帯しておき、いつでもその場で出せるようにしておきます。この写真は、イライラしてきたときに即座に提示し、「たたかないでね」というメッセージを伝えます。次に何をしたらよいかを伝える場合にも使います。

がまんできたとき、うまくできたときには、その場で称揚します。このカードでも「それでいいよ！」と、認めるサインを伝えます。
視覚的な情報の方が、わかりやすい子どもたちにとっては、このようなイラストや写真等で伝えることが効果的です。しかし、子どもにとって「守らなければならないルール」、「しなければいけないこと」、「仕事や役割」「苦手なこと」ばかりが示されると、かえって視覚的な手がかりが嫌になってしまいます。好きなことに誘う場合や、称揚するためのカードも大切です。

参考資料１　個別の指導計画（小学校　通常学級）

個別の指導計画（小学校 通常学級の場合）

1 児童の実態	氏名		小学　年　組　番	
	記入者		記入日　年　月　日	
	学習	国語		
		算数		
	生活	社会性		
		片づけ		
	診断・諸検査等			
	興味・関心			
2 保護者の願い				
3 児童に付けたい力				
4 支援の方法	支援体制			
	支援の手立て	方針		支援者
	家庭との連携	日々の連絡		
		懇談		
	他機関との連携			
5 評価				

参考資料２　個別の指導計画（中学校　通常学級）

個別の指導計画（中学校 通常学級の場合）

1 生徒の実態	氏名		中学　年　組　番	
	記入者		記入日　年　月　日	
	学習	国語		
		算数		
	生活	社会性		
		片づけ		
	診断・諸検査等			
	興味・関心			
2 保護者の願い				
3 生徒に付けたい力				
4 支援の方法	支援体制			
	支援の手立て	方針		支援者
	家庭との連携	日々の連絡		
		懇談		
	他機関との連携			
5 評価				

※これらの様式は、岡山県特別支援教育課のホームページに掲載しています。
http://www.pref.okayama.jp/site/16/detail-30067.html 内の「特別支援教育サポート事業ハンドブック」内の様式（エクセル）からダウンロードしてください。

参考資料３　個別の指導計画（小・中学校　特別支援学級）

個別の指導計画（小・中学校　特別支援学級）

氏　名		学　校　第　年　組　番	
記　入　者		記　入　日　平　成　年　月　日	
本　人　の 願　い		保護者の 願　い	
医療・福祉等関係機関等からの情報・診断等		診　断　名　・　諸　検　査　の　結　果	
配　慮　事　項 共通理解事項			
得　意　な　面 興　味　関　心		苦手な面 避けること	

	実　態	長期目標 （１年間）	短期目標 （　学期）	支　援　方　法	評　価
基本的生活習慣					
社　会　性 休　憩　時　間 交流および 共同学習等					
コミュニケーション					
国　語					
算　数					
生　活					
（その他教科）					
自　立　活　動					
そ　の　他					
支　援　体　制					

参考資料４　個別の教育支援計画（小・中学校）

個別の教育支援計画（小・中学校用）

（ふりがな）		性別	生年月日	
児童生徒氏名			学　年	
障害等の状況			手帳等	（平成　年　月　日交付）
住所			連絡先	
保　護　者　名			緊急連絡先	
在　籍　校	コーディネーター；		連絡先	
関連する学校	コーディネーター；		連絡先	

現在の生活・将来の生活についての希望			
本人		保護者	

支援の目標

在籍校での支援内容	在籍校での支援内容の評価

関係機関での支援内容			
A家庭生活	B余暇・地域生活	C医療・健康	Dその他
1.支援機関 2.支援内容	1.支援機関 2.支援内容	1.支援機関 2.支援内容	1.支援機関 2.支援内容

内容の評価

支援会議（予定も含む）					
日　時	参　加　者	協議内容・引継ぎ事項等			
更新履歴 （年月日） （更新内容）		担任確認欄 （年度・月日・印）	年度	年度	年度

策定日　平成　年　月　日　　立　　学校校長
策定担当

※また、高等学校の個別の教育支援計画も、岡山県特別支援教育課ホームページからダウンロードできます。

http://www.pref.okayama.jp/site/16/detail-61830.html

参考資料５　個別支援シート（幼稚園・保育所等）

個別支援シートのＡシート（左側）は「個別の教育支援計画」の役割、Ｂシート（右側）は「個別の指導計画」と小学校等への引き継ぎシートの役割を持つものです。

個別支援シート（就学前の機関用）Ａ

（ふりがな）		性別	生年月日
幼児氏名			
障害等の状況		手帳等	（平成　　年　　月　　日交付）
住所		連絡先	
保護者氏名		緊急連絡先	

	支援機関／担当者／連絡先	具体的な支援内容・所見等
在籍園		
医療・療育機関等		
保健・福祉		
その他		

支援会議（予定も含む）		
日時	参加者	協議内容・引継ぎ事項等

作成日　平成　年　月　日　　立　　園長　　作成担当

個別支援シート（就学前の機関用）Ｂ

		からだ・せいかつ		コミュニケーション		すきなこと/きらいなこと、行動のようす	
		からだ・健康	日常生活	人とのかかわり	コミュニケーション	すき・とくいなこと きらい・にがてなこと	行動のようす
保護者から	実態について						
	願い						
幼稚園保育所から	実態について						
	つけたい力						
	支援の手立て						

就学に向けて		大切にしてきたこと・支援のポイント	就学後の支援に向けて
	保護者より		
	幼稚園保育所より		
	医療・療育機関より		
	引継事項（就学後に、引き続き支援が必要な内容や配慮事項）		

※幼稚園・保育所等の個別支援シートは、岡山県特別支援教育課ホームページからダウンロードできます。

http://www.pref.okayama.jp/site/16/detail-9562.html